

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

<Introduction of new materials> The formative years of the relations between Shoko Ahagon (okinawa) and Ittoen: materials owned by ittoen Kosoin

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡本, 直美, OKAMOTO, Naomi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1897">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1897</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



**【正誤表】**

**■ 156 頁【表 2】**

資料番号 1 (資料内容)

「香倉院所蔵文書 書簡 4985」 → 「香倉院所蔵文書 書簡 4895」

## 資料紹介：沖縄・阿波根昌鴻と一燈園との関わり —「一燈園香倉院資料」からみる関係の形成期—

岡本 直美

### 1. はじめに

「戦後69年」、沖縄の「本土復帰」から42年経った現在も、辺野古のボーリング調査をはじめ、沖縄の基地と共にある生活は安倍政権の「積極的平和」政策下で継続している。1956年、沖縄全住民をまきこんだ「島ぐるみ闘争」<sup>1</sup>と呼ばれる軍用地問題に対する抗議運動が展開されるが、その出発点のひとつに沖縄県伊江島いえじまの土地闘争がある。1953年、伊江島は米軍より土地接収を通告された。さらに、「銃剣とブルドーザー」という言葉に表現されるように、1955年伊江島は米軍の完全武装兵により強制接収され、その土地の住民はテント幕舎あはごんしょうこうに収容された。ここにはじまる土地闘争の中心的人物の一人が、阿波根昌鴻（1901-2002）である。伊江島の闘争方法は「無抵抗の抵抗」という非暴力主義<sup>2</sup>と表現され、阿波根は「伊江島のガンジー」<sup>3</sup>や「平和運動の父」<sup>4</sup>とも称される。

伊江島の闘争方法は、直接的には米軍の土地接収に対する抵抗の過程で形成されたものであり、また、阿波根の独力で実践されたものではない。しかしながら、土地闘争の文脈において阿波根が自身における戦前の経験を想起し、当時の状況と照合しながらその経験を認識として獲得していく点に注目することは、阿波根の反戦・平和に対する態度が基地問題のみに集約されるものではないことを示している。阿波根を通して日常生活の平和実践を考察することは、現在の沖縄が位置する状況をそこに住む人々の生活から考察することにつながるだろう。それは土地闘争という、生活補償をめぐる折衝が絶えず展開する磁

- 1 この闘争に関しては例えば、鳥山淳『沖縄／基地社会の起源と相克 1945-1956』勁草書房、2013年、森宣雄・鳥山淳『「島ぐるみ闘争」はどう準備されたか』不二出版、2013年を参照。
- 2 阿波根昌鴻『米軍と農民—沖縄県伊江島—』（岩波書店、1973年、以下阿波根 a）、佐々木辰夫『阿波根昌鴻 その闘いと思想』（スペース伽耶、2003年）参照。また、伊江島の非暴力主義については、石原昌家・新垣尚子「戦後沖縄の平和運動にみる非暴力主義—1950年代の『土地闘争』を中心に—」参照。
- 3 例えば『湧』（11月号、1992年、巻頭言）にこの言葉は出てくるが、ガンジーとの相違点を具体的に論じた研究は確認できない。佐々木は阿波根がガンジーと違って当初から「非暴力」を意識していたわけではないことを踏まえて、少し言及している。佐々木、前掲書、132-134頁。
- 4 高岩仁「沖縄『平和運動の父』阿波根昌鴻さんに学ぶ」（『季刊軍縮地球市民』2号、2005年9月）参照。

場を意識しつつも時代的・地理的空間の問題に限定されない視点になると筆者は考える。

平和運動継続のためには生活の安定も必要であると主張した阿波根は、生協運動や福祉活動にも尽力し、そこに西田天香の創設した一燈園の精神がひとつの要素として包含される。戦後の土地闘争時代に阿波根ら伊江島住民は「人材育成有志会」を結成するが（1960年代）、そこでは「学習会」を開くと同時に、東京「中央労働学院」（10ヵ月・夜間）と「一燈園」（1週間）に、青年たちを派遣した。阿波根によると、この青年たちの親は戦争犠牲者であり、母子家庭で育った彼らは戦後も「米軍からは虫けら以下に扱われ、戦前日本軍からは一銭五厘のハガキ（徴兵令状）の価値しかないといわれた人びとの子どもであった」<sup>5</sup>。「人材育成有志会」は、土地闘争の実践の集積だけでは理論武装した米軍支配の正当性を強要する米軍に対抗できず、また、知識人や公職にある人々に委任しても現状は変わらないという苦い経験の蓄積から結成されたものである。そこで、社会科学の理論学習の一方で、人格形成の場として「一燈園」が選択された。両方の利点と欠点とを踏まえたいうえで、阿波根たちは実際の運動や生活を表現できる言葉の獲得としてこの方法を実行した<sup>6</sup>。

阿波根は土地闘争の全盛期を経て、反戦・平和活動の拠点として1984年に「わびあいの里」を開設した<sup>7</sup>。これは反戦平和資料館「ヌチドゥタカラの家」と平和（福祉）活動の拠点「やすらぎの家」を合わせた場（財団法人）であるが、この「わびあいの里」という名称は、一燈園精神に由来している。その「建設趣意書」には一燈園精神が「わびあいの里」建設動機の一つとして説明されており、そして2000年より毎年開催される「わびあいの里」の学習会では、第1回に一燈園同人の石川洋氏が講演を行っている<sup>8</sup>。

戦前と戦後の関連を考察することは、阿波根が暴力の行為者をどのように捉えたのかを知る手がかりになると筆者は考える。それは、米軍や日本軍の直接的暴力に限定されず、絶えず国際関係の渦に巻き込まれた沖縄で構造的暴力が作用してきたことの分析に貢献するだろうという関心のもとに、資料紹介をする。

5 阿波根 a、188頁。また、1966年には阿波根自身も中央労働学院へ行っている。

6 一燈園に関していえば、「悪くいえば人間をロボットに」するが、「よくいえば聖人」「丸い人間」をつくと主張している。阿波根、前掲書（1973年）、188-189頁。

7 1984年6月23日「ヌチドゥタカラの家」完成式、12月8日同資料館開館。設立の経緯や詳細は、阿波根、前掲書（1992年）参照。

8 （財）わびあいの里学習会報告書「第1回ゆずり合い助け合い学び合う会」（2000年1月23日24日開催分。）



## 2. 阿波根昌鴻・一燈園概説

### 2.1. 戦前の阿波根昌鴻<sup>9</sup>

戦前の阿波根については、大きく3つの時代に分類できる。まず、誕生から結婚までのⅠ期：「出生・成長」期（1921-1925）、次に移民労働者としてキューバ・ペルーで生活するⅡ期：「移民」期（1925-1932）、そして帰国後から太平洋戦争突入までの多様な場で学習し、それを実行するⅢ期：「学習・実践」期（1932-1943<sup>10</sup>）とする（【表1】参照）。戦前の阿波根について、阿波根の証言記録をもとに映画製作をした高岩仁によると、Ⅱ期の移民時代に阿波根は社会科学の学習に専念し、「資本主義社会の構造と矛盾をしっかりと学んだ」<sup>11</sup>。また、亀井淳は「移民労働の経験と一燈園との出会いから、彼は資本主義による労働搾取と、労働が生み出したものの公正な分配という大きなテーマを考え始め」、その後の興農学園での学びを「沖縄版」として実践しようとしたと述べている<sup>12</sup>。そして佐々木辰夫は「西田天香の宗教的共同生活、内村鑑三の無教会主義及びデンマーク式農業及び農民運動から学んだものが、『闘争の時代』に積極的に発展させられ、回心してく」と戦前期を捉えている<sup>13</sup>。

#### 2.1.1. Ⅰ期：「出生・成長」期（1921-1925）

阿波根昌鴻は、伊江島出身者ではなく、1901年3月3日沖縄県国頭郡本部村で「没落した琉球士族」の家に誕生した<sup>14</sup>。異母きょうだいを含む7人きょうだいの長男で、実母は阿波根と弟を生んで離婚し、その後父が再婚して弟3人妹2人が誕生している<sup>15</sup>。県立嘉手納農林学校に入学するが2か月で病気休学することになり、クリスチャンの小学校教師・知花英康の勧めで、温泉治療を目的に大分県別府（高砂町）にて生活する。別府ではホーリネス教会の大沢豊

- 
- 9 特に注釈をつけていない事実確認に関しては、以下複数の資料で共通して書かれている。阿波根 a、安藤正人「沖縄県伊江島の反戦平和アーカイブズー阿波根昌鴻資料調査会の活動ー」（『歴史評論』第739号、2011年11月）、上野英信『眉屋私記』（潮出版社、1984年）、亀井淳『反戦と非暴力 阿波根昌鴻の闘い』（高文研、1999年）、佐々木（前掲書）、山本潤一「沖縄県伊江島：反戦地主たちの生と闘いー民衆による反戦平和思想の創出に関する実証的研究」（上智大学大学院社会学科修士論文1986年）。
- 10 ここでは暫定的に、伊江島で日本軍による飛行場建設用地接收開始（1943）までとする。
- 11 高岩、前掲、53頁。
- 12 亀井、前掲書、9頁。亀井は前掲記録映画の製作資料（阿波根の談話や所有資料）をもとに執筆。
- 13 「闘争時代」とは、1953年の伊江島土地接收を契機として発展した農民たちの闘争期を指す。佐々木、前掲書、114-116頁。
- 14 これは戸籍上の記録であって、徴兵検査に不利になるよう父親が2、3年早く出生届を提出した。阿波根 a、安藤、前掲。
- 15 上野、前掲書（369-370頁）。

助牧師宅に滞在し、約1年間アルバイトをしながら治療を受け、17歳<sup>16</sup>で同牧師よりキリスト教の洗礼を受けた。回復後1度沖縄に戻り、東京での進学希望を抱いて大阪まで行って、上京するための旅費を稼ぐ目的で新聞配達をするが、関東大震災で上京が果たせず帰沖する。虚弱で農業のできない阿波根は、本部から親戚が多く来ていた伊江島で店を持つこととなり、そこで妻・喜代さんと結婚した<sup>17</sup>。

### 2.1.2. II期：「移民」期（1925-1932）

阿波根は結婚直後、移民募集の広告に応じ、海外興業第10次キューバ移民として1925年4月23日、単身で神戸港を出発する（船は安洋丸）<sup>18</sup>。キューバ到着直後に耕作地との契約を破棄した阿波根は、キューバ本島とイスラ・デ・ピノス（「松島」、現「青年の島」）でサトウキビ耕作地の清掃や製糖所で機械整備などして約5年間滞在した後、ペルーのリマに移り平安山という人物の経営する床屋で理髪業に従事した。このペルー時代に古本屋で西田天香著作の『懺悔の生活』を入手する<sup>19</sup>。

### 2.1.3. III期：「学習・実践」期（1932-1942）

帰国後、1933年に西田天香の開いた一燈園を訪問した阿波根は、京都で西田に3度会っている<sup>20</sup>。沖縄での農業実践を西田天香に勧められ、YMCAの紹介<sup>21</sup>で興農学園（静岡県・沼津）にてデンマーク式農業と社会科学等を学習する<sup>22</sup>。その後、デンマーク式農業の実践を目標に、伊江島・真謝に土地購入の資金調達のため小さな雑貨商を始め、農民学校の建設に努めた<sup>23</sup>。伊江島では蓄音機の導入や紙芝居、禁酒運動などを精力的にやり、一燈園で経験した便所掃除（托鉢の一環）も実践している。また、妻・喜代によると阿波根は農地

16 実年齢か戸籍上の年齢化は不明。

17 伊江村教育委員会編『伊江島の戦中戦後体験記録：イーハッチャー魂で苦難を越えて：証言資料集成』（伊江村教育委員会、1993年、836-838頁）。阿波根の店は喜代さんの家の近くで（西江上）、喜代さんの父が店舗を建築した。また、阿波根移民時代に息子・昌健誕生。

18 伊江村教育委員会（前掲書、837頁）、上野（前掲書、369頁）。

19 阿波根 a、10頁。

20 山本、前掲、194頁。

21 記録映画『教えられなかった戦争・沖縄編-阿波根昌鴻・伊江島のたたかい』（映像文化協会、1998年）

22 興農学園は1933年2月より、財団法人興農学園とその経営する久連国民高等学校を独立させたため、阿波根が学習したのは正確には「久連国民高等学校」ではないかと思われる。宇野豪「近代日本における国民高等学校運動の系譜（七）－興農学園とその指導者たち－」（『広島修大論集 人文編』第43巻1号、2002年9月、230頁）参照。

23 約80%完成したところ日本軍による伊江島での飛行場建設となり、戦後現在は米軍演習場内。

購入の一方で「特に決まった仕事はしていなくて、内地の偉い人から習い事をするのが、好きでしたから、教えを受けるため三カ月も家を空けることが度々」<sup>24</sup> だったことから、上記以外にも多様な活動があったことが想像できる。そのことを踏まえたうえで、阿波根は「学習」の場として一燈園と興農学園を挙げることから、阿波根の中ではこの2か所での学習が主軸となっていると考えられる。

【表1】阿波根昌鴻 戦前略年表

期	年月日	事項
I	1901.3.3	沖縄県国頭郡本部村にて出生。(出生日は戸籍上*) 県立嘉手納農林学校に入学。(2ヶ月程で病気休学) この頃、キリスト教の洗礼を受ける。回復後しばらく別府で働き、いったん帰沖後、大阪で新聞配達などをする。
	1925	伊江島で喜代さんと結婚。
II	1925.4.23	出稼ぎ移民募集に応じてキューバへ単身出発。 (海興第十次キューバ行移民として安洋丸にて神戸出港)
	1925.8.21	長男昌健誕生。
	1929	ペルーへ移りリマで理髪店に勤める。 ペルーで西田天香『懺悔の生活』を入手。
III	1932(1933)	ペルーから帰国。
	1933	西田天香の開いた一燈園(京都山科)を訪問。 興農学園(静岡沼津)で学ぶ。 (卒業後、デンマーク式農民学校の設立を志して伊江島真謝に土地を求める)
		数年かけて畜舎、倉庫、台所、風呂場を造る。
	1942	住宅(母屋)建設。牛、豚、山羊を飼育。農民学校建設中。

(注) 安藤正人「沖縄県伊江島の反戦平和アーカイブズ—阿波根昌鴻資料調査会の活動—」(『歴史評論』第739号、2011年11月)に岡本が加筆修正して作成。また、時期区分は岡本独自のもので、安藤設定のものとは異なる。

加筆修正した参考資料：阿波根書簡(「香倉院所蔵文書 書簡4985」)、『光』(259号)。上野英信『屋根私記』潮田出版社、1984年。伊江村教育委員会編『証言資料集成 伊江島の戦中・戦後体験記録—イーハッチャー魂で苦難を越えて—』伊江村教育委員会、1999年。

【時期区分】I期：出生・成長期。II期：移民期。III期：学習・実践期。

\*徴兵検査に不利になるよう父親が出生届を2・3年早く提出したため、戸籍上は1901年生まれ。

## 2.2. 西田天香と一燈園

西田天香<sup>25</sup> (1872-1968) は、「大乘仏教の精神の実践者」<sup>26</sup> とも「経済倫理を確立した思想家」<sup>27</sup> とも表現される人物である。20-30歳代に北海道開拓事業や鉱山経営の失敗を経験し、10年近い放浪生活を経て、利他行の実践に献身する

24 伊江村教育委員会、前掲書、839頁。

25 天香の本名は市太郎であるが、1901年より天香と号している。一燈園も天香の名で創設しているため、本稿では以下天香と記す。

26 栄沢幸二「西田天香の思想」(『社会科学年報』第24号、1990年)。

27 並松、前掲。

生活に到達した。資本主義下で生じる社会問題に対して関心を持ち始めた天香は、「経済社会組織の改革ではなく、個々人の道徳的自覚と、その厳格な実践こそが社会変革の原動力になると考えた」<sup>28</sup>。そこで天香は路頭托鉢を実践するが、宮田によるとそれは禅宗的托鉢とは異なる意味も持っていた。禅宗的托鉢が、「路上で、あるいは各戸を回りながら布施を受ける行為」であるのに対し、天香の托鉢は「社会への奉仕全般を指す」もので、食糧調達的手段ではなく「与える気持ちをもらいにいく」という位置づけであった。そのため、自己の執着を捨てる個人の修業が、社会的教化の意味をもつことで、社会に対する救済活動にもつながるという発想であった<sup>29</sup>。その結果、生存競争を伴わない平和な経済生活を希求し、利他行の実践の拠点として1913年に創設されたのが一燈園である<sup>30</sup>。

天香は、私利・我執を捨てた「無」の境地を「天華香洞」と名付け、その具体的な生活形態を一燈園と宣光社とした。一燈園は無所有の生活形態で、宣光社は仮所有の経済規範を意味する<sup>31</sup>。一燈園の托鉢は、「他人から奪うのではなく、自らに与えられたものによって生きていく」生活であり、その一燈園を「仮所有」の形で支えるのが宣光社である。宣光社は、一燈園の集団生活を物質的に支えるものであり、事業運営や寄付などによって得られた資財から、浄財のみを預かり、それを運用する「仮所有」の方法をとった。ここでの「浄財」とは、与える側の犠牲心に基づいた分与で、宣光社は企業的組織形態を持ちつつも、一般企業のような利益追求を主目的とするのではなく、あくまでも社会的責任を果たすことを目的として運営された<sup>32</sup>。そして、天香や一燈園同人が用いる「おひかり」という用語は「御光」や「光」と表記されるが、これは例えば、神や仏を統一するような「真理の働き」であると捉えられている<sup>33</sup>。

天香著作『懺悔の生活』は天香の講演や談話が収集されたもので、1921年に出版された。この書籍の人気拡大で講演依頼が急増した天香は、日本国内にとどまらず海外へも招致されるようになった<sup>34</sup>。

28 並松、前掲、357頁。

29 宮田昌明『西田天香 この心 この身 このくらし』（ミネルヴァ書房、2008年、82頁）。

30 天香は二宮尊徳の報徳思想の延長上に独自の経済倫理を確立し、また、トルストイの『我が宗教』との出会いは、思想的転機ともなった。元は、天香周辺の女性の集まりとして一燈園は誕生。

31 天香はこの関係を「三位一体」とであると表現する。西田天香『懺悔の生活』（春秋社、1921年、3頁）。

32 第1次世界大戦後の不況や労働争議の激増の中で、天香は実業家（鐘紡、伊藤忠、久原鋳業など）との交流を深めつつ、小作争議の現場で活動した。並松、前掲、347頁。

33 遠島欽二『賀川豊彦 西田天香 倉田百三と其信仰』（日本佛教新聞発行所庚申堂書店、1922年、103頁）。

### 3. 資料からみる阿波根と一燈園

#### 3.1. 本資料の位置づけ

阿波根昌鴻は「記録の人」とも呼ぶべき膨大な資料を残した人物である。その資料は書簡や手記、写真や投稿した文章など多様であるが、現存するその大部分が戦後土地闘争以降のものである<sup>35</sup>。阿波根の戦前に関する経歴に言及した書籍も発刊されているが、一燈園との関係はその事実を記すにとどめられており、多くは阿波根の証言によるところが大きい<sup>36</sup>。この点でまず、本稿で扱うような文書化された記録は、事実関係の客観的確認と、証言との照合による阿波根の思想考察の深化に貢献できると考える。また、今回紹介する資料の保管先である一燈園資料館「香倉院」では、戦前より昭和期までの阿波根が登場する資料は13点確認できる（【表2】参照）ものの、その資料を使用した先行研究はみられない。本稿では戦前期5点の資料に注目して紹介し、戦後の資料に関しては今後の課題として示すにとどめたい。

戦前期の資料は、特に地上戦を経験した沖縄では現存するものが限定されており、公文書記録や新聞記事も確認できるものは少ない。また、伊江島島民は戦後すぐ米軍により慶良間諸島などへ強制移住させられたため、1947年の帰島までに記録を消失している。

以上より、本稿で紹介する資料は、膨大な資料を残した阿波根の軌跡においても、戦前沖縄・伊江島の生活を垣間見る点においても意味あるものであることを確認しておきたい。

---

34 宮田、前掲書、126-137頁。海外講演は1924年の台湾より始まり、満州、ハワイ、カリフォルニアにも訪問している。例えば台湾では台湾総督府に招致された。

35 阿波根が遺した資料に関しては、「阿波根昌鴻資料調査会」が2002年からその内容の調査と保存に取り組んでいる。（資料調査会の中間報告に関しては、安藤（前掲）を参照。また、写真記録の一部は沖縄県立図書館に保管されており、阿波根資料における写真映像の意義については、小屋敷琢己「〈記録としての写真〉から〈表象としての写真〉へ—阿波根昌鴻資料における写真映像の意義—」を参照。）

36 例えば、阿波根 a（前掲書）、阿波根 b（前掲書）、亀井（前掲書）、佐々木（前掲書）があり、その他映像記録もある（参考文献参照）。



【表2】阿波根に関する「香倉院」所蔵資料（戦前～昭和期）

資料番号	年月日	種類	資料内容
1	1937.1.11.	書簡	阿波根から西田宛。「香倉院所蔵文書 書簡4985」
2	1939.4.15.	新聞	『光友』69号。桑原好男による報告文掲載。
3	1939.5.6.	書簡	阿波根から西田宛。「香倉院所蔵文書 書簡7059」
4	1939.5.15.	新聞	『光友』70号。桑原好男による報告文掲載。
5	1941.7.15.	機関誌	『光』259号。桑原好男による報告文掲載。
6	1964.3.10.	機関誌	『光』518号。阿波根による桑原追悼文掲載。
7	1964.9.4.	書簡	阿波根から西田宛。「香倉院所蔵文書 書簡7461」
8	1973.8.10.	機関誌	『光』631号。石川洋「土の願い」
9	1974.2.10.	機関誌	『光』637号。木村右次「沖縄路頭行願をおえて」
10	1974.7.10.	機関誌	『光』642号。阿波根昌鴻「米軍と沖縄の農民」
11	1977.2.15.	機関報	『光友』423号。井伊文子「仏桑花の会」
12	1979.4.10.	機関誌	『光』699号。石川洋「花は土の上に咲くー「沖縄行願」と「WCRP 沖縄学習会に祈りてー」
13	1986.2.10.	機関誌	『光』781号。石川洋「おわびの心で十五年を迎えた沖縄県の六万行願」

以下、【表2】の順に従って具体的に資料紹介をする（【表2】1～5）。

### 3.2. 阿波根と西田天香との出会い

〈資料1：書簡 1937年1月1日付〉

謹啓

先生の上に天父様の御恵みの豊かにあらん事を祈らせて居りましたが、先生には台ワンの御務めも事なくすませられ茲に昭和十二年の新春を迎えることの出来ました事を、心から御喜び致して居ります。

陳者昭和八年九月入園の希望を抱いて、貴林に五日間先生の御麗姿に接し、又御講話を承りまして、先生が歸郷して農業やるがよいと申されましたので、感謝の内に歸郷致しまして、今日まで商や農に働いて参りましたが。自分の変り弟と十三才の長男を燈影小學校に入學させたいと存じますが、入學させて頂くことは出来ませんか。又、男の方でも女の方でも農か店に働かれる方を一人、沖縄の爲め、托鉢させて下さることは出来ませんか。誠に恐縮でございますが、右の件に付きまして委細御返書下され度休して御願ひ申し上げます。

先生が益々御壯健に、人類のため御働き下さらんことを祈り上げます。（先生の多くの著書並に、光誌を讀ませて頂きまして厚く御礼申し上げます）

昭和十二年一月十一日

沖縄縣國頭郡伊江村（以下住所：引用者省略）

阿波根昌鴻

西田天香先生様

まずここでは、阿波根が1933年（昭和8年）9月に5日間、入園を希望して一燈園に滞在したことが確認できる<sup>37</sup>。阿波根は移民先からの帰国年を著書<sup>38</sup>では1934年としていることもあり、阿波根を扱う多くの記事や資料ではこの年が採用されている<sup>39</sup>。したがって、ここに記載された訪問年は、阿波根の経歴にとって補足的情報となる。

天香の勧めにより帰郷した阿波根は、農業だけでなく商業にも従事して生活し、誰か（おそらく一燈園同人）を派遣するよう求めていることから、一燈園的托鉢を沖縄にも広めたいとの姿勢がみられる。また同時に、弟と長男の2人を燈影小学校<sup>40</sup>に入学させ、一燈園の教育を受けられるよう希望している。そして、この時期、阿波根は天香の著書並びに光誌（一燈園の機関誌）を購読していたことが確認できる。書簡の入った封筒には、表に「子供入学」、裏に「お断り」と記されていることから、この時点での小学校入学は実現しなかったであろうと読み取れる。

### 3.3. 一燈園同人（桑原好男）の沖縄訪問

#### 3.3.1. 最初の沖縄訪問

以下紹介する資料3点は、一燈園同人が初めて沖縄を訪問した時のものである。

〈資料2：『光友』69号（1939年4月15日発行）。(「ママ」以外でついているカタカナのルビは原文)〉

沖縄縣に點ぜられた<sup>光</sup>

—光友阿波根さんの禱り—

熱心な光友阿波根昌鴻さんは、種々な点に於て非常に遅れて居る沖縄縣の開発には、是非共一燈園の<sup>ママ</sup>行き方が必要であり、それには先づ自分から一步を先行し、

37 「貴林」とは財団法人・光泉林（一燈園）を指す。

38 阿波根 a

39 帰国年を1932年（上野、前掲書、376頁。）、1933年（佐々木、前掲書、219頁。）とする資料もある。

40 前身は1924年に開設された「燈影小塾」で、1933年に小学部が「燈影尋常小学校」となった。宮田、前掲書、174頁。

啓發する事が第一であると自覺され、數年前から獨力無一物から始めて奮闘努力し、村の爲め、友の爲めにも精神的に、將又物質的に献身奉仕されつゝ、小さな雜貨商を営み、僅かな福田に恵まれ乍ら、妻子と共に勤儉力行、僅か五年にて村内廿數件の商店中今では群を抜いて光<sup>ママ</sup>つてゐる。

近頃、將來性ある土地十町歩近くを買入れ、これ等を一切光<sup>ママ</sup>に捧げて、一家を擧げて托鉢生活に徹し祈られる事となり、希望に輝き乍ら、村の改善、縣全体への光<sup>ママ</sup>の輝き渡るやうにと深禱されて居られる。

×

御懇望に依り私は沖繩へ托鉢させて頂き、各處を見學し、且つ又祈らせて頂き乍ら、内地より離れた流球の島に、かくも深き禱りを罩めて居て下される人のある事を拜んで、天香さんの御徳の廣大なる事と、阿波根さんの熱烈なるお禱りに限り無き敬意と、感謝を捧げ合掌させられた次第であります。

阿波根さんは伊江村（一離島、人口約七千人）の役場及び小學校等の六萬行願や清掃托鉢には、實弟で日本大學御卒業の昌福さんと共に御深禱下され、尙沖繩本島の本部村及び、一離島である屋我地島<sup>モトブ</sup>の國立癩療養所（愛樂園）では三日間に亘って御深禱下されたのであります。

伊江島、本部村、屋我地島<sup>ヤカヂシマ</sup>療養所等いづれも、一燈園の話をせよと懇望され、ありの儘を話させて頂いたゞけなのに何處でも非常に喜ばれ、何處も農村であったが聴衆が堂に溢れ、熱心に終りまで聴いて下され、本部村（阿波根さん御出生地）公會堂などでは、後で座談會になり、突込んだ質問や一燈園を研究されてる方が卅名程居残り、午前二時近く漸く散會した程であります。

（桑原好男）

### 沖繩各地の催し

- 一、沖繩縣國頭郡伊江村小學校にて、前村長中原様他、村有志座談會。
- 一、同村前江上青年會並に處女會合同の席上で講演、「一燈園生活と青年の使命」と題して。
- 一、本部村小學校分教場にて一般講演（約百五十名）と托鉢（六萬行願）
- 一、本部村濱元公會堂にて一般講演（約百名）と托鉢（行願）
- 一、屋我地島國頭療養所愛樂園（癩療養所）では三月廿三日夜職員座談會を開き廿四日午前中は、病院の先生及び事務の方、阿波根昌鴻、昌福御兄弟など御參禱の下に患者便所の汲取托鉢、其他奉行同日午後一時より二時半迄入園患者一同を慰問を兼ねお話をさせて頂きました。



〈資料3：書簡 1939年5月6日付〉

合掌。月々の光誌並に光友によりまして我々が毎日楽しく働くことの出まますことを厚く御礼申上げます尚ほ三月八日より二十五日に至る間同人桑原様を御使はし下され、沖縄各地に御光を御傳へ下されまして我々も心行一致することを得まして心から御喜び申上げます。甚だ恐縮に存じますが、もう一度沖縄の爲め桑原様を御使はし下され六萬行願を共にさせて頂かれます様、伏して御願ひ申上げます。勝手乍ら、委細は桑原様より御聴取下され度、重ねて御願ひ申上げます。先生の御健康と御許し下さる様祈らせて頂きます。

五月六日

阿波根昌鴻

西田天香先生

〈資料4：『光友』70号（1939年5月15日発行）。(文中の促音「つ」は全て原文のママ)〉

沖縄だより

預かつて下さい

沖縄を去る前日、私の泊めて頂いてゐた阿波根さんの家へ、一人の青年が訪れて、これをどうか桑原さんに預かつて貰ひたい、差上げるのではありません、預かつて頂くのですから、どうか御願ひ致しますと、無理に置いて行かれたので止むを得ず開けて見ると、十円札が入れてありました。

阿波根さんは驚いて、どう致しませうかと私に相談されました。私は、そんなに向ふで心から預かつて呉れと云はれるのなら、拜んで預かつて光友會の産れる爲めにでも使はして頂いたら良いでせうと申しました。尚今一人の青年が同じ様に預かつて呉れと置いて行つた人があり、是れは五十銭這入つて居りました。

芋（甘藷）を常食とし、原始的な粗末な家に住み、質素を通り越した生活をし乍ら一銭の金も使はぬ堅い青年が、心から捧げ切つて出される態度と、意外な金に日常を知る當の阿波根さんの驚きは大きかつた様でした。

小學校の座談會と、青年會の席上で私の話を聞いてくれた人々らしい。純眞な一離島の村の人の心は光にふれると、全く直感的に反射し輝く様です。

其の後の沖縄だより

合掌、先日は誠に有難う御座いました。今朝は昌實さん、昌健さんを農學校に入學さす可く那覇迄参りました。

桑原様に習ひまして、三名五時起床、貴方様を頭に思ひ浮べ乍ら家の中を始め、

隣り近所の清掃托鉢をさせて頂きました。

ほんたうに良き事を教へて下さいました、厚く御禮申し上げます。遠い沖繩迄来て頂いて何一ツ<sup>ママ</sup>貴方様の爲めに出来なかった事を御許し下さい。

多分農學校に入りまして、校長さんに御願ひして、二人は便所掃除の托鉢をさせて頂き度いと思つて居ります。又學校が始まる迄、私も一緒に三人して托鉢させて頂く考へです。

貴方様の御出立の時も誠に失禮致しましてすみません。伊江島へ歸りますと、一人の青年の奥様が、夫が非常に其の日から善くなつたと喜びに来てゐたと、家内が話して居りました。又一人の青年は、今年の“夏の集まり”に参加したいと希望を述べて居ります。私も非常に得る處が多く、心から托鉢が出来る様になりました。只感謝ばかりで御座います。

再び一燈園の御方の御來島を祈って居ります。何卒宜敷御計ひ願ひ上げます。今日出立致しますのでこれで失禮致します。御大事になさいませ。合掌

三月卅一日 阿波根昌鴻  
桑原好男様

(筆者附記) 御實弟と御子息二人を八重山の農學校に入學さす可く那覇市迄行かれ、旅館に泊つて朝托鉢されてる様子と、乗船前(八重山迄船で二日かゝり)のお忙しい様子が解ります。感心な御方です。(桑原報)

以上3点の資料によって確認できたことをまとめると、一燈園から同人の桑原好男<sup>41</sup>が1939年に初めて沖繩を訪れ、3月8日から25日まで滞在したことが分かり<sup>42</sup>、先述の書簡(【表2】-1)から2年後にようやく阿波根の希望が叶ったことになる。当時の阿波根が営んでいた雑貨商は、「僅か五年」で伊江村内にある20件余りの商店の中でも「群を抜いて」いたこともあって、「将来性ある土地十町歩近く」を購入した。桑原によると阿波根は熱心な光友(一燈園の共鳴者)であり、自ら率先して弟の「日本大学御卒業の昌福さん」と共に桑原の托鉢に同行した。これまで阿波根のきょうだいに関する情報はほとんど確認できないため、ここで新たに関係を知ることができる。伊江村内では小学

41 桑原は1934年(昭和9)に一燈園に入園し、1936年(昭和11)より福岡一燈園を担い、九州一円と沖繩で活動した。(『光』第518号、1964年、30頁。)

42 文中の「六萬行願」とは、以下6項目に規定される。(宮田、前掲書、86-87頁)

①布施：与える気持ち。②持戒：破壊的態度を慎むこと。③忍辱：悪に対して悪で報いず、徳と愛で悦服させること。④禪定：心身を整え神仏と合一すること。⑤精進：科学、生産、奉仕活動に励むこと。⑥智慧：一切の成就と衆生済度の方便を備えること。

校や村長を交えた村有志の座談会が開かれ、「前江上青年会並に處女会合同」の場で「一燈園生活と青年の使命」と題して桑原が講演した。また、役場や小学校など公的な場で活動したという活動報告から、一燈園精神が村全体に広がるよう阿波根は会場設定に尽力し、青年教育の一環としても取り入れたであろうことがうかがえる。

桑原の托鉢は伊江村内にとどまらず、本部村と屋我地島にある愛樂園（ハンセン病者療養施設）にも及び、本部村では、比較的大規模な一般講演（約150名と約100名）が行われ、沖縄での公演や座談会が好評に終わったことが記されている。これら講演・托鉢地がどれも阿波根に関係する場であることと、桑原が阿波根の家に宿泊していることから、第1回目の沖縄滞在は、阿波根と弟が中心となって招致したことがわかる。

「其の後の沖縄だより」からは、昌實<sup>43</sup>と昌健（息子）を八重山の農学校に入学させたことが分かる。天香宛の書簡（資料1）で依頼した燈影小学校への入学が果たせなかった息子の進学がここで実現されている。そして、托鉢の実践報告と、さらに農学校の校長にまで願い出て進学する2人に便所掃除（托鉢の一種）をさせる考えであると書いていることから、阿波根の熱心さがうかがえる。

### 3.3.2. 2度目の沖縄訪問

〈資料5：『光』259号（1941年7月15日発行）。(文中の促音「つ」の表記は全て原文ママ)〉

「沖縄の一燈 —光友阿波根さんの禱り—」

四月十五日鹿兒島發、同十七日那覇着四年目<sup>44</sup>に又沖縄托鉢をさせて頂く。相変わらず埠頭には人力車が多く、四年前には皆跣足の車夫が、今度は皆地下足袋など穿いて居り、市内にも多く見受けられた跣足歩きの人が、なくなつてゐる事に氣着く。

伊江島の光友阿波根さんは那覇までお迎へ下さる。那覇市に二泊。首里市、糸満町等見學して十九日伊江島へ着き、船の都合などの爲め五月一日まで伊江島に托鉢。五月二日出帆、五日福岡へ歸らして頂いた。

沖縄では四月と云ふのに大豆はふくらんで居り、胡瓜は長く太つてゐる。バナ

43 「昌實」と阿波根との関係は現在のところ不明である。また、本稿紹介資料〈資料4〉において、阿波根は「昌實」との関係性に言及しておらず、桑原が「御實弟」と紹介するにとどまっている。

44 前回の沖縄訪問は資料より1939年で、今回の資料は1941年の『光』誌に掲載されている。したがって、「4年目」ではなく「2年目」とであると推定される。

ナバパイヤ等もみのつてゐる。農村は黒砂糖の製造で多忙の様である。阿波根さんの農場に美し過ぎる程の豚舎と牛馬舎は石造で出来上り、住宅の工事中であった。地均らし、建築基礎コンクリートの仕事、それから棟上げまで御手傳ひさせて頂いた。熱い太陽の直射を浴び乍ら、畑の麥刈や造林の種子蒔きなどもした。

阿波根さんの家に矢張り四年前から顔馴染の光友で、前村長中原幸吉さん始め村の有力な方々十数名集つて、ランプの灯の下で夜遅くまで、和やかな座談會を催して下さつた晩もあつた。先年祈つた親しみある役場、學校などの六萬行願も愉快にさせて頂き、何時も乍ら阿波根さんの徹底振りを拜む。小學校行願の時、校長先生から痛み入る程御禮を言はれ、生徒に是非一燈園のお話をと無理に頼まれ、五年以上の生徒に一時間程一燈園のお話を聴いて頂いた。

沖縄は平均米の少ない縣であり、伊江島と云ふ所は一粒の米も取れぬ所、節米と云ふ言葉は此の島では必要はない。三食皆甘藷であり、米は一ヶ月一人當り三合割當と云ふから、病氣でもした時、一回お粥でも頂く位である。

保守的な未開の地で、色々の舊い習慣を破って、多くの悲難や反對を押切り、光の生活を實證して島民の範となり、尚全沖縄への宣光を目ざして、恵まれた農場を守り立てて道場とし、青年推進員の育成と共に、宣光社的經營へと心魂を込込んでみられる阿波根昌鴻さんの御健禱を祈る。合掌。

— 桑原生 —

桑原（一燈園）による2度目の沖縄訪問は1941年（昭和16）4月17日より5月1日（2日出発）までで、今回も阿波根が中心となって実現している。約1週間の伊江村における活動では、前回同様、村長や有力者を集めた座談會が阿波根宅で開催され、小学校・役場での托鉢も行われた。このとき、阿波根の農場に石造りの豚舎や牛馬舎はすでに完成し、住宅が建設中であつた。当時の農場建設に関する詳細は明らかではないが、1941年時点の様子を通して途中経過を確認することができる<sup>45</sup>。この住宅工事や農作業にも桑原は参加していることから、講演や座談会とは異なる生活の場でも阿波根と桑原が交流したと示されている。伊江村民の反応としては、小学校校長が桑原に「痛み入る程御礼」を伝えたことや、その他の好評な様子がかがえる活動報告の一方で、「保守的な未開の地」で阿波根が「多くの避難や反對を押切り」、「島民の範」となろうと一燈園精神の実証に努めたと桑原は報じている。

45 例えば安藤（前掲書）の年表では1942年とあるが、それまでに豚舎・牛馬舎が完成していたことを本資料で新たに確認できる。住宅（大きくてモダンな母屋）は昭和17年（1942）に作ったと阿波根喜代が証言している。（伊江村教育委員会：1999）840頁参照。

#### 4. まとめ

本稿で紹介した資料により、今まで具体的な事実確認が困難であった戦前の阿波根の活動において、一燈園との関係性が作られた時期を確認することができた。特に戦前の伊江島での一燈園活動については、「便所掃除をした」という阿波根の記述以外に情報がないため、今回入手した資料は当時の様子考察に大きく貢献する。また、一燈園は日本全国に托鉢していながらも沖縄までは及んでいなかったところを阿波根が率先して招致したことは、阿波根の先駆者的性格を改めて確認する具体的事例となった。

今回紹介しなかった一燈園香倉院資料（【表2】6-13）では、1950年代の本格的な土地闘争時における一燈園と阿波根との関係は登場しないが、「復帰」以降も阿波根に関する資料がみられることから、戦後の関係も維持されていたことがわかる。

さいごに、本資料より、昭和10年代に阿波根が実際に活動し、一燈園精神に深く共鳴してきた姿が確認できた。したがって、戦後の土地闘争における阿波根の発言や活動を一燈園精神との関わりから読み解くことも重要になると思われる。例えば、1950年代の「乞食行進」や「乞食托鉢」という表現が、どのようにかたちづくられたのかを考えるうえで一燈園精神が手がかりとなるであろう。

#### 参考文献

- 阿波根昌鴻 a (1973) 『米軍と農民－沖縄県伊江島－』 岩波書店
- 阿波根昌鴻 b (1992) 『命こそ宝－沖縄反戦の心』 岩波書店
- 安藤正人 (2011) 「沖縄県伊江島の反戦平和アーカイブズ－阿波根昌鴻資料調査会の活動－」 (『歴史評論』第739号、2011年11月)
- 伊江村教育委員会編 (1993) 『伊江島の戦中戦後体験記録：イーハッチャー魂で苦難を越えて：証言資料集成』 伊江村教育委員会
- 石原昌家・新垣尚子 (1998) 「戦後沖縄の平和運動にみる非暴力主義：1950年代の「土地闘争」を中心に」 (『沖縄国際大学社会文化研究』Vol.2, No.1、1998年3月)
- 上野英信 (1984) 『眉屋私記』 潮出版社
- 宇野豪 (2002) 「近代日本における国民高等学校運動の系譜（七）－興農学園とその指導者たち－」 (『広島修大論集 人文編』第43巻1号、2002年9月)
- 栄沢幸二 (1990) 「西田天香の思想」 (『社会科学年報』第24号)
- 亀井淳 (1999) 『反戦と非暴力 阿波根昌鴻の闘い』 高文研
- 小屋敷琢己 (2011) 「〈記録としての写真〉から〈表象としての写真〉へ－阿



波根昌鴻資料における写真映像の意義一」(『琉球大学教育学部紀要』第78号、2011年2月)

佐々木辰夫(2003)『阿波根昌鴻 その闘いと思想』スペース伽耶

高岩仁(2005)「沖縄『平和運動の父』阿波根昌鴻さんに学ぶ」(『季刊軍縮地球市民』2号、2005年9月)

遠島欽二(1922)『賀川豊彦 西田天香 倉田百三と其信仰』日本佛教新聞発行所庚申堂書店

鳥山淳(2013)『沖縄／基地社会の起源と相克 1945-1956』勁草書房

並松信久(2009)「西田天香の経済倫理と一燈園生活」(『京都産業大学日本文化研究所紀要』第14号、2009年12月)

西田天香(1921)『懺悔の生活』春秋社

宮田昌明(2008)『西田天香 この心 この身 このくらし』ミネルヴァ書房

森宣雄・鳥山淳編(2013)『「島ぐるみ闘争」はどう準備されたか』不二出版

#### 映像資料

高岩仁監督(1998)『教えられなかった戦争・沖縄編-阿波根昌鴻・伊江島のたたかい』映像文化協会